

Newsletter

2007. Jul. No.

10



「教養」—— 記憶をつなぎ、人をつなぐ

教養研究センター副所長 | 中島陽子 (文学部)

によって情報を繋ぎあわせ、聞き手の心に感動を与える内容を語るような人たちです。

ケータイが出現する以前から、活字や電波など、人の営みに必要な情報を得る手段はたくさんあり、それぞれ文化として、私たちの存在に大きな影響を与えてきました。人は、

近頃、街に出て驚かされるのは老若男女みな掌に握ったものに見入っている光景です。「ケータイ」ですね。あれは「でんわ」ではなくて「モバイル端末」で、いまや若者たちはコンピューターよりもこれで情報の入手や交換をしているのだそうです。ところで、私の子供時代の大人たちは、時に応じた例え話や警句をたびたび発し、『立川文庫』だよとあって、日本の歴史の一コマを、生き生きと語ってくれたものです。中国や、あるいは聖書やシェークスピアなどと、古今東西の言葉をちりばめて語る大人たちを、私は尊敬のまなざしで見上げて聞き入ったものです。今日、私たちが「モバイル端末」を始めとした外部装置を介して入手するコンテンツを、大人たちは頭の中に貯めて持っていたのでしょうか。そしてそれらの取り出し方に、その人の味を感じさせるような魅力がありました。ただ多くの情報を持つだけでは、単なる『物知り』です。『知恵者』として尊敬を得るのは、自らの理念や哲学

こういった情報を視覚や聴覚を通して体の中に受け入れられます。さらに五感のうちの触覚、味覚、嗅覚といった、より初原的で無意識的な身体感覚も情報として貯えられます。意図的であるなしにかかわらず、時々刻々入ってくる情報群は大脳新皮質の連合野という部分で総合し、判断し、記憶し、そして何かの形で発信します。このときの総合判断には身体感覚もその人固有の情報源として重要な位置にあります。

このようにして全身、全存在で獲得した脳内の記憶が繋ぎあわせられ、話し手に固有の表現となって表現されたとき、感性を全開にした聞き手に受け止められ、その人の脳の中に新たな記憶として心地よく収まります。このようにそれぞれの人の頭の中で繋ぎ合わされ想像力をかきたて、さらに人と人との間を繋ぎ合わせるネットワーキングこそが『教養』の真髄なのではないでしょうか。そこに人としての存在の意味があるのだと思います。

CONTENTS

1	巻頭言	「教養」—— 記憶をつなぎ、人をつなぐ
2	特集	身体知の理念と可能性 身体を用いた教育の可能性を追求することを目的とした基盤研究「身体知プロジェクト」。 3つの基本軸を設定し、バランスとつながりを意識しながら展開される研究活動をフィーチャー。 非言語、視覚と非視覚としての身体知 身体知としての芸術教育を考える 身体知を通して考える新しい文学教育 「開かれゆくキャンパス—— 貫教育の冒険」と「声」のプロジェクト
5	活動報告	極東証券寄附講座「生命の教養学」 サイエンス・カフェ「クマムシの話—— 基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究—改革への処方箋—」成果発表会 教員サポート 学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト2006年度研究成果報告会 2007春 HAPP イベント / 2007年度日吉キャンパス公開講座
8	ニュースフラッシュ	
8	事務局だより	新たな一歩





身体知の理念と可能性

武藤浩史（法学部）

今、座学に限定されない授業が、求められているのではないのでしょうか。危機と変革の時代には、全人的な知が必要とされるからです。消費社会化と核の危機と国家威信の低下に挟撃され、物質的富と倫理的貧困という「陽気で悲惨な」戦後先進国社会の問題点があらわになった1950年代のイギリスでは、道具的な知性にとって代わる新しい身体的・全人的な知性が、思想家により、芸術家により、学者により、さまざまな形で、提唱されました。彼の国の60年代以降の文化的復興の根底には、そのような身体知への気づきがあるのではないかと私は思っています。

慶應義塾においても、フィールドワークを取り入れた少人数授業やインターンシップのような体験型実務教育が徐々に広がりつつあり成果を挙げています。しかし、同時に、それ以外にもあり得るさまざまな効果的な授業形態の可能性を探っていくことが、大学教育の未来のために不可欠だと思います。論理的思考力が感性や身体性と手を携えて初めて真の知性が生まれることは言を俟ちません。脳研究が示すように、感性から独立した知性はあり得ないからです。考えるという行為は、身体に触発され身体と不可分の全人的な行いです。さらに、身体は、現代思想でも、脳科学や認知科学でも、芸術や臨床心理学の領域でも、大きな注目を集めながら、それぞれが社会構成主義、科学主義、体験主義と異なる枠組みで研究・教育が進められてきて、相互間の交渉が乏しかったように思われます。それぞれの成果を研究のみならず教育の実践を通して統合する試みがなされるべき時期にきています。身体性に注目する所以です。

教養研究センター基盤研究の身体知プロジェクトは、2005年度から、以上のような問題意識を基に、身体を用いた教育の可能性を追求することを目的として、月例研究会を開催し、続く2006年度後期には、熊倉敬聡氏（理工学部教授）と手塚千鶴子氏（国際センター教授）をコーディネーターとして、カウンセラーやダンサーを外から招いて、「体をひらく、心をひらく」と題する身体を用いたワークショップ

形式の実験授業を行いました。内外から20人ほどの参加者を得て、好評を博したことから、さらなる展開を目指したいと思っています。そのために、思考と感性をめぐる人の基本的特性を勘案し、また授業実践上の問題も考慮して、次の3つを身体知プロジェクトの基本軸として設定したいと思っています。

第1の軸：言語—非言語

人間は言語的動物です。言語を抜きにした知性や他者との交流は不可能です。しかし、同時に、人間は、思考においても、コミュニケーションにおいても、自らが思っている以上に非言語的であり、このような言語性と非言語性の並存と対立の矛盾への洞察が、人間知性を考える上で不可欠です。

第2の軸：視覚—非視覚

人間は視覚が他の感覚の優位に立つ動物です。授業においてもヴィジュアル化が推進され、人間の視覚優位性を活用した教育が活発ですが、同時に、人間の原始的な根幹部分は非視覚的——触覚、嗅覚など——であり、テクノロジーの発達に刺激された視覚情報の増大は、かえって人間の感性と思考のバランスを崩す危険性も有します。言語の場合と同様、視覚と非視覚の並存と対立の矛盾への洞察が教育上大切です。

第3の軸：場

第1と第2の軸は、自然科学そして精神分析の成果に支持された理念的区分と言うことが出来ませんが、第3の軸はより実践的です。大人数での共同体的実践を考えるか、少人数での親密さと双方向性を重視するか——もちろん、双方が大切ですが、これを、人と人との距離の問題、コミュニケーションの問題などを含めた「場」の軸として捉えたいと思います。

これらの軸に基づいて、対立要素間のバランスを取りつつ、軸相互の繋がりも意識しながら、年度ごとにテーマをはっきりさせ、めりはりも付けながら、発展性のある活動を展開してゆく予定です。

■ 非言語、視覚と非視覚としての身体知

教養研究センターでは、2005年春から「身体知プロジェクト」と称して、大学教育における身体知の在り方を巡って理論的な研究会を行い、その成果に基づき2006年秋学期に実験授業「体をひらく、心をひらく」を行いました。今年度は、その延長線上で、さらに身体知を精査すべく、「へたる身体／つきぬける身体」(仮題)という表題の下、現代の日本人(特に若者)の身体の現状と潜在力について、アート・歴史・思想・科学・医療・教育など多領域から専門家を招き、理論的な探究を行う予定です。そして、その研究会と並行して、今年度も秋学期に実験授業「体をひらく、心をひらく②」を行う計画です。また、詳細は未定ですが、今回は、表現アートセラピーもしくはダンスセラピーに焦点を当てて、プログラムを組むつもりです。また、これまで3回に渡って行ってきた「現代芸術展」および昨年開催した「クリスト&ジャンヌ＝クロード講演会」での実績を基に、「感動教育・芸術教育を考える」(仮題)というプログラム(詳細未定)も行う計画です。

(熊倉敬聡)

■ 身体知としての芸術教育を考える

旧来の大学の芸術教育は、芸術作品の鑑賞と歴史的音楽作品に関する知識の伝授に重点がおかれてきました。大学における導入教育は、かつての教養主義的教養に留まらず、学生が身につけてきた経験知や身体知を結びつけた、コミュニケーション能力の向上、問題発見・問題解決能力の涵養に重心を移しつつあります。芸術教育は、こうした近年の新しい教養教育の理念に寄与するさまざまな可能性をもっています。

日吉キャンパスでは、HAPPでの活動、日吉美術研究室、日吉音楽学研究室を中心にさまざまな芸術実践活動、体験活動が展開されています。こうした活動のなかには、他大学に例を見ない先進的な活動を含んでいます。

これらをさらに発展させ、総合大学で学ぶ1、2年生に向けてどのように「芸術」のあり方を教えるのかを、アーティストと教職員・学生がともに考えていく過程重視型の教育カリキュラムを開発していくことが今後の課題です。また、これを他の教育プログラムと有機的に関連づけるということは、孤立化・断片化した知の時代、知が人間の身体を離れてデジタル化されて伝達されていく時代において、極めて重要な意味をもつと考えられます。

(佐藤 望)

HAPP と身体知

日吉では1994年以来、「知識・言語表現偏重型学習からの脱却」と「『身体』を用いた知の学習」を目指したプロジェクトが動いていた。舞踏家の大野一雄氏を招いての公演(これは大野氏が93歳になる2000年まで続く)に端を発した一連のプロジェクトは、後に入学歓迎行事、そして教養研究センターのHAPP(Hiyoshi Art and Performance Project/日吉行事企画委員会)の活動へと引き継がれている。HAPPは、芸術イベント、スポーツイベント、学生による自主的公演など、教職員・学生一体型のさまざまな協働

活動を含み、地域・社会へと開かれた大学の実現の一助ともなってきた。

いわばHAPPは、教養研究センターにおける身体知研究の生みの親であり、そのルーツであるということができる。大野氏の公演等のHAPPの記録は、現在小菅隼人工学学部・教授を中心にアーカイブ化が進められている。これらの記録は、これからの身体知研究にも大きく寄与するものであり、さらなる研究の深化と発展が期待されている。

(佐藤 望)

未来先導基金に採択決定！

教養研究センターの「基盤研究」は、現在ふたつの研究組織を走らせています。ひとつは高等教育のカリキュラム・モデルを慶應義塾を中心に考察し、改善を提言していく「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」。そしてもうひとつが、身体のあり方そのものを、初等教育から高等教育までの流れの中で見つめ直すことを目的とした「身体知プロジェクト」です。2007年度に後者の一環として立ち上がったのが、「『声』を考える—教育現場での意義」プロジェクトです。その目的は、発信の主体である自己に立ち戻り、「何を」ではなく「だれが」語るのか、「どのように」伝えたいのかという意志伝達の基盤

を、「声」を切り口に考えていくことです。すでに文字化された表現を身体と声を通して捉え直す。あるいは、音楽という非言語表現を実践しながら歴史や文化という言語化された記述の中で捉え直す。その双方向の試みから新たな教育の可能性が見えてくるはず。今回、この「声」の実践プロジェクトが義塾における未来先導基金の支援を受けさせていただくこととなりました。以下、このプロジェクトの一部をご紹介します。そしてひとりでも多くの皆様方に事業に参加していただきたいと思います。興味をもたれましたら、ぜひとも教養研究センターまでご連絡ください。（横山千晶）

■ 身体知を通して考える新しい文学教育

人間の体験を文字によって表現したものが、文学なのだとしたら、再び身体経験に返して文学を味わい尽くすには、時間と新たな場、そして物や人との接触が必要です。今回はふたつのワークショップを通じて、文学への新たなアプローチを図ります。ひとつは今まで座学中心で行われていた文学を身体と声という新しい表現法に置き換えて新たな創造の糧とすることです。身体を通すことで、言語の裏に隠れた非言語的な含みも表面化することでしょう。次に、身体で「読んだ」ことを今一度、自分の言葉で創作し直します。こうして言語知から身体知へ、そして再び言語知に還るループが描かれるのです。このような試みは、大教室での授業を補完するものとして、大きな貢献を果たすことでしょう。もうひとつのワークショップは、ドラマを通して、新たな外国語教育の可能性を探ることです。文学としての演劇を楽しむだけでなく、実際に観客の前での公演を目標とすることで、学生は自分と登場人物、登場人物同士、そして登場人物と観客という3つのコミュニケーションの場を体験します。日本語以外の言語で他人の心理を理解し、それを観客に伝える。このハードルに、身体ごと挑んで行く学生たちにとって、ひとつひとつのせりふはもはや他人のもの、他言語によるものではなく、自分自身の表現となることは間違いないでしょう。

（横山千晶）

■ 「開かれゆくキャンパス — 一貫教育の冒険」と「声」のプロジェクト

文字はまさに音です。言葉の綾で華麗な、あるいは枯淡の世界を作り出した昔の人々は、いかなる文化であれ、この音の力を知っていたはず。教養研究センター主催の「開かれゆくキャンパス — 一貫教育の冒険」の朗読会シリーズは、その力を教育の現場で見直す試みでした。2回にわたる朗読会は、慶應義塾志木高等学校と幼稚舎で行われている、群読を通して古典を理解する授業をもとに始まりました。2005年度は幼稚舎、普通部、女子高、志木校、大学生をつなぐ群読会が『平家物語』を題材に行われ、2006年度は中等部、卒業生、教員にまで参加層を広げ、福澤諭吉の書簡を読みました。異なる世代が一堂に会して同じ物を読むことは、参加者にさまざまな発見の機会を与えてくれました。朗読する内容をよりよく理解しただけではない。生きるということは変化する声を身にまもっていくことであるとあらためて実感したのです。

2007年度、志木高校では速水淳子教諭のもと、能楽師を講師に招いて「謡い」を学ぶ授業が進められています。謡いは日本語を完全な形で響かせる発声法で、古くから受け継がれ、教授法も十分に確立されたものです。今までの試みを含め、このような新しい授業の成果を一部の現場にとどまらず慶應義塾の教育全般にわたる資産にし、音声表現の教育のあり方を考え、意見交換できる場を設けていくこと。それが「声」のプロジェクトの大きな目的のひとつです。（横山千晶）

極東証券寄附講座「生命の教養学」

本年度は「誕生と死—その間にいる君たちへ」をサブタイトルとしました。さまざまな分野の講師陣が真摯な思考を展開する姿を目の当たりにして、「いのち」について考えてもらいます。

4月26日、新緑萌える公孫樹の中、日野原重明・聖路加国際病院理事長をお招きしました。今年96歳、「10年後の夢」のお話に、この方ならできると会場全体がそのオーラに包まれました。そして10



歳の小学生への「いのちの授業」について、教壇上をところ狭しと闊歩されながら、時には足を振り上げ、また「しゃぼん玉」を大声で歌い、最後には学生の中に降りて、感情豊かに語りかけておられました。

「寿命という大きな空間の中に、瞬間瞬間の自分をどう投げ入れればよいのか、ということはとてもむずかしい」と少女からの手紙を紹介されました。そして、人が自由意志でどうにでも使える自分の時間こそが、その人の「いのち」そのものということを強調されていました。

この授業について essay の中で、小学生と同じぐらい純粹で素直な大学生の反応に感

動したこと、大学生にも送るべき「いのちのメッセージ」があることを痛感されたことが記されていました（朝日新聞5月26日朝刊 Be 掲載）。

（吉田泰将）



サイエンス・カフェ — クマムシの話 —

生物教室の若手スタッフを中心に、自分たち自身が「面白い!」と思っているテーマを、肩のこらないかたちで一般の人たちに話す場を作ろうということで、「サイエンス・カフェ」という新しい試みが始まりました。6月23日の午後、トップバッターとして医学部の鈴木忠さんが、彼のペット「クマムシ」を紹介しました。極東証券寄附講座「生命の教養学」の企画の一部です。緑に囲まれたイベントテラスの「カフェ」に小学生も交え21名の参加がありました。「カフェ」という企画には程よい規模でした。初めての試みに、会場のしつらえなどさまざま気を使って準備し、当日も会場で気を配っていて下さったスタッフの方々に感謝いたします。

クマムシは、専門家からも注目されているようですが、一般の人にも、十分面

白いいきものです。まず、小さい（1ミリ以下）のに、先端に鉤のある脚を8本も持っていてそれでヨチヨチ歩く姿がなんともかわいいのです。参加者には、用意した実体顕微鏡、顕微鏡で、その姿を自分で観察してもらいました。仲間は海の底にもいるそうですが、観察したのは、校舎に張り付いているコケに住むクマムシです。私たちが気づかずに歩いているその足の下には、実は彼らのたくましい生活があるのだそうです。当日のような好天が続いてコケがカラカラに乾いてしまうと、クマムシも縮んでビヤ樽状にかたまると耐えていて、水分が再びやってくるとムククリ目覚めるといわれています。そこから、クマムシの不死身



伝説が広まったそうですが、これは過剰表現だそうで、彼らも死ぬときには死ぬと聞いて、少し安心しました。それにしても石ころのようなかたまりが、もぞもぞと動き出した瞬間には感動しました。この企画は2カ月に一度のペースで続ける予定になっています。皆様どうぞ一緒に楽しみませんか。

（中島陽子）

基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究—改革への処方箋—」 成果発表会

2005年～2006年にかけて教養研究センターで行われたカリキュラムに関する研究会の成果報告会が、2007年6月30日(土)14:30～17:00に、シンポジウムスペースで開催されました。この研究会は、次代の大学教育のかたちを論じるために、合宿を含む二十数回の研究会に加え、広範な調査を行って、カリキュラム改革に関する28項目からなる提言を提出しています(報告書は3月31日に学内に配布)。

まず、座長の伊藤行雄・経済学部教授より、「研究の目的と提言の意図」について報告があったあと、村山光義・体育研究所准教授が「成績評価に関する実態調査報告」、坂本光・文学部准教授が「習熟度別クラス編成の整備」、萩原眞一・理工学部教授が「学部カリキュラムの比較分

析」、佐藤望・商学部教授が「学生アンケート調査結果」について、それぞれ報告を行いました。最後に伊藤行雄座長が、「日吉共通科目のカリキュラムを運営・検討する組織の設立について」と題し、具体的な提案を発表しました。木俣章・法学部専任講師の司会のもと、朝吹亮二・法学部教授/日吉主任代表、西村太良・学務担当常任理事もディスカッションに加わりました。とりわけ「日吉共通科目カリキュラム運営委員会」の設立の必要性について盛んな議論が行われました。本研究の成果および提言は、学生の声の詳細で綿密な調査に基づく意義深いものであり、今後大学教育委員会で報告するな

どして、今後の改革に生かしたいという趣旨の理事の指摘もありました。

この成果をもとに、今後各学部等とも協力しながら実現に向けて具体的な歩を進めていくことが重要でしょう。報告内容および論議の様子は、シンポジウム報告書として、教養研究センターより刊行予定です。

(佐藤 望)



教員サポート

カリキュラム改革の進展に従って、日吉の教員が従来とはかなり性格の異なる授業を担当するケースが増えています。たとえば、少人数の履修者にリテラシー教育を行う授業などもその一つです。このような授業は、教員各自の工夫で学生から確実な手応えを引き出すことができやりのある反面、必ずしも自分の専門でない分野や普段手慣れていない研究

調査方法を指導しなければならないこともあり、困惑してしまうことも多いのではないのでしょうか。

教養研究センターでは、新しい教育環境に置かれた教員をサポートし、よりよい授業を実現するための方法をお互いに考える場として、教員サポートワークショップを新たに企画しました。その第一回として、6月20日(水)・6月25日(月)に、教養研究センター・日吉メディアセンターの共催によるメディアリテラシーワークショップ「メディアセンター・サービス活用術—少人数セミナー授業での実践ワークショップ」が開催されました。

このワークショップは、問題発見—資料収集—問題考察—レポート作成までのプロセスを、学生にメディアセンターの資料とツールを十分に利用させつつ行わせるには

どのように指導すればよいかを考えてみようという趣旨のもと企画されました。日頃、日吉の学生向けの情報リテラシーセミナーを担当している図書館員が、資料に確実に辿りつくための検索キーワードの立て方・さまざまな検索ツールの使用に当たって気をつけるべき点・収集した資料の整理の仕方など、情報のプロならではの視点からの実践的な手法を紹介しました。あわせて、KittyやPathなどメディアセンターが提供するサービスを効果的に授業に取り入れる方法も紹介しました。

当日は両日とも多くの教員が参加し、プレゼンテーション終了後に活発な質疑応答もなされ、関心の深さが伺われました。秋学期にはフィールドワークについてのワークショップが開催される予定です。

(種村和史)



学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト 2006年度研究成果報告会

去る4月28日(土)の午後1時からセンター特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトの2006年度研究成果報告会が開催されました。3年計画の活動の2年目とあって、統合研究ボード、コンテンツ研究ユニット、学習環境構築研究ユニット、デジタル化研究ユニットから多様な研究活動の成果が報告されました。

今回はアドバイザーとして、塾内からは各学部日吉主任、外国語教育研究センター所長、総合研究推進機構事務長・研究支援センター本部事務長の柴田浩平氏、塾関係者として小沼通二名誉教授、戸張規子名誉教授、塾外からは横浜市文化芸術都市創造事業本部事業本部長の川口良一氏、財団法人アサヒビール芸術文化財団事務長・横浜市芸術文化振興財団専務理事の加藤種男

氏、同志社大学教務部長・全学共通教養センター所長の圓月勝博氏をお招きし、口頭・文書を通して貴重なアドバイス、評価をいただきました。

今年度の最終成果報告取りまとめに際して十分に活かしていきたいと考えております。

(羽田 功)

2007 春 HAPP イベント

日吉行事企画委員会(HAPP: Hiyoshi Art and Performance Project)では、本年度春学期において教職員企画として右記の入学歓迎行事を展開しています。

また、秋学期には学生公募による企画が行われます。これからの活動など、詳しくは、<http://www.hc.keio.ac.jp/happ/> をご覧ください。

(佐藤 望)

江戸古典奇術 手妻のタベ	藤山晃太郎水芸・手妻の鑑賞会	4月25日
林望氏講演会	演題「英語で暮らしてみました」	5月10日
小栗康平監督最新作の上映と対談	映画と時代を見つめ続ける、日本を代表する映画監督が、若い世代へ映画と今を語る	延期(日時未定)
環境週間	パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する	6/18~6/22
インド音楽のタベ	インドからの音楽家を招き現代インド最高級の音楽を聴く	6月19日
フランス音楽祭	フランスをテーマとした初夏の演奏会シリーズ	6/25, 7/2, 7/4
「塾長と日吉の森を歩こう」	塾長と学生がともに日吉の森を散策	日時未定



インド音楽のタベ

2007 年度日吉キャンパス公開講座

本年度の日吉キャンパス公開講座は「モノをつくる」をテーマとし、9月1日から12月8日までの毎週土曜日(3~4時限)、第4校舎J14教室で開催されます。プログラム内容は次の通りです。

講義日(土曜日)	テーマ	講師
9月29日	3時限 開講式/モノ造りとは?つくるとは?	経済学部教授 小湯 昭夫
	4時限 物と技術について —ハイテックの恩恵を手がかりに	理工学部専任講師 荒金 直人
10月6日	3時限 中国映画に見える快楽の表象—纏足と豚足	経済学部教授 村越 貴代美
	4時限 伝来の中国音楽とその日本化 —江戸の文人音楽を中心に	坂田古典音楽研究所 坂田 進一
10月13日	3時限 未来を創る—子供を育む	法学部教授 小瀬村 誠治
	4時限 量子コンピュータとナノサイエンス	理工学部教授 伊藤 公平
10月20日	3時限 住民参加とこれからのまちづくり —飛騨高山地方の事例より	経済学部准教授 長田 道
	4時限 観光とまちづくり	総合政策学部准教授 古谷 知之
10月27日	3時限 ビグマリオン系の系譜	経済学部准教授 山本 賀代
	4時限 タンバク質を並べて素子を創る	医学部教授 古野 泰二
11月10日	3時限 古書のまちづくりと観光化	文学部教授 藤田 弘夫
	4時限 地域と大学が連携した創造 —愛知県豊川稲荷門前のまちづくりと建築ものづくり	豊橋技術科学大学准教授 松島 史朗
11月17日	3時限 即興の現在—ジャズ、DJ、エレクトロニカ	法学部専任講師 大和田 俊之
	4時限	
11月24日	3時限 生き物の色・模様・形づくり	高学部教授 福澤 利彦
	4時限 本をつくる	元文藝春秋編集総局長、 東海大学文芸学部特任教授 湯川 豊
12月1日	3時限 政治的美学の深淵—創造の現場にて	法学部専任講師 映像作家 佐藤 元秋 小泉 明郎
	4時限	
12月8日	3時限 テキスト、素描、音楽を樹い交える —サティ館さんの音楽工房	高学部専任講師 コミネティ・フィリップ
	4時限 映像と音楽の融合/閉講式	経済学部教授 小湯 昭夫

「教養研究センター選書 4」刊行



教養研究センター所員・研究員の先端的研究活動を、学生や一般読者にわかりやすく紹介するために刊行されている「教養研究センター選書」。第4回公募に採択された常山菜穂子法学部准教授による『アンクル・トムとメロドラマー 19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会』が3月末に刊行されました。

FD セミナー グンブレヒト教授講演会
スタンフォード大学における教養教育の取り組み

教養研究センターは、3月13日にアメリカスタンフォード大学よりハンス・ウルリッヒ・グンブレヒト教授を招いて「大学の人文科学に未来はあるか?」というテーマでセミナーを開催しました。このセミナーは、2003年より教養研究センターが不定期ながら継続的に行っているFD (Faculty Development) に関する一連の事業の一環として行われたものです。グンブレヒト教授は「リスクフル・シンキング」をキーワードとして、人文科学 (Humanities) の重要性を我々に明快に示してくれました。

(近藤明彦)

「フィールドワークセミナー」開催

5月25日(金) 16:30 ~ 18:00、来往舎大会議室にて、対中円借款事業に関する調査で豊富な経験をお持ちの顧林生氏(清華大学公共管理学院研究員、清華大学都市計画設計研究院、公共安全研究所所長)をお招きし、講演会「フィールドワークの現状と課題—中国国内での現地調査から」が開催されました。当日は総合教育セミナーを受講している学生を初め約50名が聴講し、講演後も顧先生を取り囲んで、熱心に質問する学生の姿が見られました。

(岩波敦子)

「塾生入門～scientia、科学、サイヤンス」
第一回講演会

6月13日(水) 16:30 ~ 18:00、来往舎大会議室にて、金田一真澄理工学部教授を講師にお招きし、「塾生入門～scientia、科学、サイヤンス」第一回講演会が開催されました。本講演会シリーズは、常に「自分らしさ」を追い続けることの素晴らしさを、ご自身の学知の軌跡を通じて語っていただくという企画です。はしかによる全校休講のため延期されるというハプニングに見舞われましたが、若かりし金田一先生の悩みや、理工学から言語学への方向転換、そして学者一家である金田一家三代のエピソードなど約30名の聴講者が金田一先生のお話に引き込まれた講演会でした。

(岩波敦子)

「事務局だより」新たな一歩

今年の4月より教養研究センター学術フロントの業務を担当することになりました。この2カ月はただただ目の前にある仕事を進めることで毎日が過ぎてしまったように思えます。最初は「超表象デジタル研究」というのはいったいどのような研究なのか見当もつきませんでした。

しかし、教養研究センターの特定研究プロジェクトから生まれたhydiの内容更新作業といった業務を通じて、この研究の重

要性を知ることになり、今では「社会の中での大学の存在意義」、「未来での大学の姿」がどうあるべきかなどを自分なりに考えるようになりました。また、講演会を通じていろいろな世界観・知識を持った方の考え方を知ることができ、この研究に関わられたことをとても嬉しく感じております。

このような喜びをひとりでも多くの人に感じてもらうために、初めてホームページを閲覧する人でもわかりやすくなっている

ことが重要だと考えております。そのために、今後は全体像を見やすく階層をシンプルにすることを心がけていきたいと思えます。

そして、研究者の方々が心地良く研究に打ち込める環境をつくっていくことも事務局の大きな役割だと思うので、研究者の方々とコミュニケーションをとりながら、努力していきたいと考えております。

(蔭山千恵美)